

日本古代宮都の研究

著者	吉田 歓
号	59
発行年	1997
URL	http://hdl.handle.net/10097/14423

よし
吉

だ
田

かん
敏

学位の種類 博士(文学)

学位記番号 文博第59号

学位授与年月日 平成10年3月25日

学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当

研究科・専攻 東北大学大学院文学研究科(博士課程後期3年の課程)
国史学専攻

学位論文題目 日本古代宮都の研究

論文審査委員 (主査)
教授 今 泉 隆 雄 教授 須 藤 隆
教授 大 藤 修
助教授 柳 原 敏 昭

論文内容の要旨

序

本論では宮城中枢部を通して日本の古代国家の特質について考察する。そのため序では日本の宮都に関する研究史を特に宮城中枢部に焦点をおいて整理する。日本の宮都研究の歴史は古いが、戦前においては主に文献史料や遺跡の地上観察・地名などからの研究が行われていた。しかし、戦後になってそうした宮都の比定や復原だけではなく、宮都全体の展開のあり方に着目した研究が現れるようになった。そして岸俊男・狩野久両氏によって従来の研究方法とは異なる、宮殿の機能を考える機能論的な研究がはじまった。機能の検討から宮殿の性格を明らかにするという手法は画期的であり、現在さかんに行われている宮都研究の直接的な出発点となった。また岸氏の儀式史料を使った研究も今日行われる儀式研究に影響を与え、宮殿の機能を考える際に儀式研究が大きな意味を持つようになっている。こうして現在宮都研究はさかんになっているが、問題点として①これまでの研究は大極殿・朝堂に中心がおかれ、内裏や曹司についてはまだ不十分な点、②平城宮以降の研究は大きく進展しつつあるが、逆にそれ以前について

の研究は少ない点、③日本の宮都の源流である中国の都城に関してはそれほど深い研究はなされていない点、④最近の研究動向として律令国家の完成を平安前期に求める見方があるが、宮都の展開から見るとどのようなことになるかという点といったものがある。一方中国の都城研究においては近年日本と同様に機能論的な研究も多くなりつつあるが、やはりまだ十分とは言えない。

以上のような研究史を踏まえて、まず中国の宮城中枢部の展開過程を検討し、日本の宮都の検討を行いたい。そこで①宮都の展開から日本の古代国家の展開を見る、②日中の宮城中枢部の比較を通じて中国の皇帝に対する日本の天皇制の特質を考える、という二つの課題を設定する。

第1部 中国の宮城中枢部

第1章「魏晋南北朝時代の宮城中枢部」では日本の宮都の源流を考えるために、隋唐長安の成立過程として魏晋南北朝について検討する。隋唐長安の宮城中枢部は主要な殿舎が南北に並ぶ南北軸であったのに対して、魏・西晋には太極殿・東西二堂型式という東西軸の宮殿構造が確立した。太極殿・東西二堂型式というのは、大きな儀式を行う太極殿を中心に、皇帝が日常的に政治を視る東堂、と皇帝の居住空間である西堂とを東西に配置した型式で、この型式はその後南朝の諸王朝に継承されるが、宋代になると西堂も皇帝が定期的に聴政する建物に変化し、同時に西堂にかわる皇帝の居住空間が新しく建設される。ここにこの型式は変質することになるが、以降の南朝においても基本的には継承されていく。また北朝の北魏では当初この型式とは異なる北魏独自の宮城中枢部が建設されていたが、孝文帝の時代にいわゆる漢化政策が採用されて中国化が推進され、その一環として宮城中枢部も太極殿・東西二堂型式に改変された。それははじめ北魏の都であった平城に導入されたが、洛陽に遷都することで都城に関する漢化政策は完成する。

だが北魏が東西に分裂した後、太極殿・東西二堂型式は東魏・北齊には継承されたが、西魏を経て北周では全く新しい『周礼』に基づく南北軸の型式が採用された。これは『周礼』の記述に復古的に従ったもので、燕朝・治朝・外朝の三朝からなる型式である。これまでこれら三朝の機能は論者によって理解が異なっていたが、『周礼』『礼記』本文に従って検討した結果、燕朝が皇帝の聴政場所、治朝が臣下の朝賀を受ける場所ということがわかった。さらに北周から禅譲を受けた隋の大興城、それを継承した唐の長安城にも基本的に継承されるが、それは北周とは異なり内朝・中朝・外朝の三朝からなる形式であった。これらは燕朝などとは違い、内朝が皇帝の居住空間、中朝が皇帝聴政の場、外朝が臣下の朝賀などを受ける場というように、北周の三朝制とはずれがある。しかしこの形式はすでに魏晋南北朝時代から存在していた。こうして外から外朝・中朝・内朝という三つの区画からなる隋唐の長安が完成した。前期難波宮

の宮城中枢部の東西に脇殿が付属する形態が魏晉南北朝の影響を受けたものという岸氏の指摘があるが、前期難波宮の脇殿がその遺構から東西二堂に相当するとは考えにくく、やはり隋唐の影響を受けていたと考えられる。

第2章「隋唐長安宮城中枢部の展開」では前章を受けて隋唐の皇帝の執務の形態を検討し、日本の天皇の執務のあり方を考える前提とした。唐の宮城中枢部については『大唐六典』の中に内朝・中朝・外朝の三朝制からなっていたと記され、長安太極宮では内朝が両儀殿でここでは皇帝の日常的聴政が行われ、中朝が太極殿で毎月朔望の日に皇帝が臣下の朝参を受け、外朝が承天門で元日朝賀などを受ける場であったとされている。従来この説明に従っていたが、前章の検討結果からすると、内朝は皇帝の居住空間であり、中朝は皇帝の聴政場所であったことになる。本章ではこの点を実例を整理することで明らかにし、太極殿は皇帝が日常的に出御して朝参を受け奏事を聴く場であり、両儀殿が重要案件について重臣を召して議政する場であったことを指摘する。それが三代皇帝高宗の代から毎日太極殿に出御することがなくなっていき、両儀殿にしか出御しなくなっていく。

そして唐後半期には新たに建設された大明宮に皇帝の居所が移るが、そこにも内朝の紫宸殿、中朝の宣政殿、外朝の含元殿が作られた。これらの機能も原則的には太極宮と同じく紫宸殿が皇帝の居住の場、宣政殿が日常出御して朝参を受け奏事を聴く場、含元殿が元日朝賀などを受ける場であった。しかしこの原則は実際には守られておらず、皇帝は宣政殿には日常出御せず、紫宸殿で聴政していた。だが臣下の朝参はまず宣政殿において行われ、皇帝が宣政殿ではなく、紫宸殿に出御することになると、朝参してきた臣下らを紫宸殿に召していた。このように太極殿に出御するか、紫宸殿に出御するかは、これまでの研究では二者択一的に考えられていたが、両方の可能性があり皇帝によって選択されていたということになる。つまり宣政殿に出御しない場合は、紫宸殿で朝参を受けていたのである。しかし大事なのはその場合でも宣政殿に朝参するのがあくまでも基本であった点で、やはり皇帝の日常的出御場所は宣政殿であった。さらに出御場所が紫宸殿に定着する過程を追うが、画期は徳宗朝にあり、この時期に宣政殿に出御する形態の復活がはかれる。それ以前においては実際には皇帝は紫宸殿に出御しており、そこで聴政していた。しかし安史の乱以降、乱れた制度を立て直す一環として、徳宗朝に朝参制度も整備されなおした。そこでは朝参場所は宣政殿を原則としており、宣政殿での聴政が復活されようとした。しかし結局その後の諸皇帝は宣政殿ではなく紫宸殿に出御するようになっていった。以上の検討結果から、大明宮が太極宮の矛盾を解消するものであった点が指摘できる。太極宮では『大唐六典』に元日朝賀は外朝の承天門で受けるとされているのに、実例では太極殿で行われていた。これは魏晉南北朝以来の伝統によったものと思われるが、これに対して大明宮では、外朝の含元殿が元日朝賀の場として実際にも使われており、太極宮における矛盾を

解決している。

第2部 大極殿の研究

第1章「天皇聴政と大極殿」では隋唐の皇帝が中朝の太極殿で聴政していたことを受けて、日本の天皇が大極殿で日常政務を視ていたことを指摘する。天皇の聴政場所については平安前期に関しては平安宮内裏の紫宸殿であったことが知られていたが、奈良時代については二つの説が出されていた。一つは大極殿であったとするもの、もう一つはすでに内裏正殿であったとするものである。そこで本章では律令の規定に則って検討する。唐令の儀制令には、日食や皇帝の親族・重臣の喪の際には皇帝は政治を視ないという規定があった。この場合、第1部第2章で見たとおり皇帝の聴政場所は本来中朝の太極殿や宣政殿であったので、皇帝は中朝には出御しなかった。この規定を日本令の儀制令も継受したが、『続日本紀』では廃朝と表現されていることから、逆に奈良時代の天皇は日常大極殿に出御して聴政していたと推測される。しかし、実質的な聴政は内裏正殿で行われていたと考える。それは天皇の印である内印の押捺の仕方から推測され、こうした実際の政務は内裏正殿で行われていた。それに対して大極殿での聴政は、狩野氏がすでに指摘されているように、大極殿が臣下を排除した天皇の独占的空間であったことから臣下が大極殿一郭に入って天皇に直接奏上することはなく、臣下たちの政務は太政官の朝堂で処理されていた。つまり臣下たちの政務は朝堂院の中で完結していたことになり、大極殿に出御した天皇はそこから朝堂院で行われている朝政を見ているだけであった。このように大極殿での天皇聴政は象徴的なものであり、実質的な聴政は内裏正殿で行われていたのである。このように天皇聴政も二重構造を持っていたことになるが、二重になったのは大極殿が排他的な性格に変わった時からであった。それまでは前期難波宮の内裏前殿のように同じ建物で臣下の朝参を受けるとともに日常的な政務も視ていた形から、大極殿で朝参を受けて象徴的な聴政を行い、内裏正殿で実質的な聴政を行う形に変化したと考えられる。そして制度的には実際に天皇が大極殿に出なくなっているとしてもこの原則は奈良時代いっぱい継承されていた。しかしそれが長岡宮の内裏が朝堂院から分離して西宮から東宮に移転した時に、天皇聴政の場は内裏に統合されたと思われる。そして天皇が大極殿に出御しなくなる理由は天皇と臣下双方にあったと思われ、天皇としては当初は臣下を毎日朝参させるための求心力として自分も毎日出御する必要があったが、朝参の制度が定着してしまうと必ずしも出御する必要がなくなっていたし、臣下にとっても朝参する意味は朝堂での朝政に参加することに重点が移っていき、しかも天皇に直接奏上することもできないので、天皇の出御を必要としなくなっていった。こうして天皇の日常的な出御は行われなくなっていった。

第2章「太極殿と大極殿」では日本の大極殿の成立過程を検討して、宮都の中国化の画期を平城宮の中央区建設に求める。まず中国の太極殿が魏晋南北朝と隋唐とでは性格が異なること

を指摘する。魏晉南北朝では太極殿上の皇帝の座は元日会や読五時令などの際、南面以外の方向にも設けられていた。だが隋唐になると致齋や皇太子と私的な関係で対面する時などの例外を除いて、君臣間の席次である南面しかなくなり、しかも特殊な場合を除いて、天皇は太極殿の中でも頂点に位置する北壁下にすわっていた。このことから皇帝権力が強大化したことがうかがえる。逆に両時代に共通しているのは、臣下や外国使節なども太極殿上に昇ったり、太極殿一郭に参入することができた点である。それに対して日本の大極殿は、狩野久氏が指摘されたように、天皇の独占的空間であり太極殿とは性格が異なる。この点では日本の大極殿は中国の太極殿を単純に模倣したとは言えず、むしろ日本独自の性格であったことになる。逆に臣下たちを召し入れていた点で、まだ大極殿ではなく『日本書紀』の文飾とされる飛鳥浄御原宮の「大極殿」（天皇の独占的空間である大極殿に対してそうでないものには「」を付す）の方が中国的であったということになる。最近小沢毅氏は飛鳥浄御原宮の遺構の検討から飛鳥浄御原宮ですでに「大極殿」が成立していたことを指摘されているが、名称としての「大極殿」の存在は小沢氏の指摘のように否定できない。しかし、臣下を召し入れることができる「大極殿」から排他的な大極殿に変質したのは、飛鳥浄御原令の制定に起因していると思われる。持統朝に制定された飛鳥浄御原令の前後の記事を比較すると、それ以前では大極殿でも臣下を召して饗宴などが行われていたが、制定以後になると貴族層を内裏に召して饗宴が行われ、全臣下が参加する場合には朝堂で行われていた。つまり大極殿に召すということがなくなるのである。このことから臣下を召し入れない大極殿の成立は飛鳥浄御原令制定を画期としていたことになる。しかし平城宮の新しい形態の中央区の大極殿は広い前庭を持っており、今泉隆雄氏の指摘によれば元日朝賀などの際臣下をそこに召し入れていたという。とすればこの中央区は日本独自の太極殿が中国化された最大の画期と言える。天武・持統朝は天皇権力が強大化した時期とされるが、その時期に大極殿も臣下を排除した空間となったが、平城京遷都にともなって唐の太極殿を模倣して臣下を入れる形態になったのである。近年宮都の中国化は平安前期に大きく進展するという見方が出されているが、宮城中枢部の展開から見ると奈良時代初めにあったと考えられる。

第3章「旬儀の成立と展開」では旬儀について検討する。旬儀は、10日ごとに臣下を内裏に召して天皇が饗宴を賜うとともに政務を視るという儀式である。これまで旬儀は本来天皇が毎日政務を視ていたのが、徐々に視なくなっていき、ついに10日ごとになり、さらに年2回の二孟旬になったとされてきた。しかし、正史などを整理すると、日常的に内裏の紫宸殿に出御していたと考えられる桓武朝から仁明朝までの間にも、旬儀らしい記事が多く見出されることから、毎日の天皇聴政が衰退して旬儀に変わったという通説は成り立たない。このことから旬儀の本質は政務を視ることではなく、饗宴にあったことがわかる。そして平安前期の饗宴の記事

を整理すると、桓武朝から淳和朝までは旬儀の日以外の日にも饗宴がさかんに行われていたが、次の仁明朝になるとほとんど全て旬儀の日になる。また旬儀の本質をよく表す侍従厨献物儀が登場するのも仁明朝以降であり、場所が紫宸殿に固定するのも仁明朝であった。これらの点から旬儀の成立は仁明朝であったことがわかり、旬儀の本質は定期的に臣下を内裏に召し、臣下を代表して侍従厨から天皇に献物が行われ、それに対して天皇から饗宴を賜わるという、君臣関係の確認にあった。そして臣下にとっては旬儀で支給される禄は定期的な収入としての意味があった。このような旬儀は日本独自に始められたものではなく、中国の定期入朝制を模したものである。中国では古くから臣下を定期的に朝参させる制度があったが、日本では毎日朝参する制度であり、中国のような定期入朝制は導入されていなかった。それを導入したのが旬儀であった。しかし旬儀はこの後饗宴から政務儀礼へと変化する。それは文徳朝から陽成朝まで断絶した後、光孝朝に復活した際に、光孝天皇は毎日紫宸殿に出御しなくなり、旬儀の日だけに御出で政務を視るようになったことによる。この旬儀の変質によって紫宸殿は天皇が毎日聴政する場ではなくなり、政務儀礼も含めて儀式の場へと変化した。また、天皇も本来毎日御出で聴政する律令制的な天皇から、御出でせず清涼殿で生活しつつ聴政する王朝国家的天皇に変化したと言え、その最初が光孝天皇であった。

第3部 宮城の空間構造

第1章「内裏の脇殿」ではこれまであまり研究の手が及んでいなかった内裏に注目し、内裏正殿に付属する四棟の脇殿の機能の検討から、内裏正殿一郭の性格を考える。一般に脇殿は正殿に座す主人に対して臣下が座す場と考えられていたが、平安宮内裏の紫宸殿に付属する脇殿はいずれも収納施設として使われており、儀式や饗宴の場合にもそこに臣下の座が設けられることはなかった。そして臣下の座は脇殿ではなく、紫宸殿の前庭に幄舎を設置してそこに設けられていた。つまり紫宸殿一郭の空間構造は紫宸殿－前庭という形態であったことになり、この形態はさらに遡って飛鳥浄御原宮や平城宮の内裏にまで遡ることができる。このように令制以前から内裏正殿一郭の空間構造は正殿－前庭という形態であった。一方脇殿の機能も直接的な史料はないのであるが、平城宮跡から蔵人に関する墨書土器が発見されており、平安時代において蔵人は紫宸殿の脇殿を管掌していたことから、奈良時代にも蔵人がいたとすれば、内裏正殿の脇殿もこの蔵人によって管掌されており、やはり収納施設であったということが推測される。このように内裏正殿一郭が正殿－脇殿ではなく正殿－前庭という空間構造であったとすれば、饗宴の際に臣下の座が設けられる朝堂院と比較すると、内裏の形態が本来的であり、朝堂院の方が後次的であったと言える。つまり朝堂院において饗宴の際に臣下の座が設けられるのは、そこが本来臣下が政務をとる庁であったから、臣下の座が設けられるのは当然であった。それに対して内裏では朝政は行われないから朝堂は最初から存在せず、臣下の座を設けるため

の施設は存在しなかったのである。この点で朝堂院の方が使い方としては後次的であったことになる。

第2章「曹司の空間構造」では宮城内の役所である曹司について、やはり脇殿の機能に注目しながら検討する。しかし全ての曹司については論及できないので、脇殿が付属していたことがわかる太政官曹司庁と宮内省曹司、そして近年発掘調査で遺構が確認された式部省曹司などを取り上げる。阿部義平氏によって地方の国庁のコ字型建物配置は太政官曹司庁をもとにしていたとされる。しかし太政官曹司庁は国庁のモデルとは言えない。つまり太政官曹司庁は正庁が公卿以上の議政官の議政の場であり、西庁が弁官による日常的な執務の場、東庁がやはり弁官の下級役人の勤務評定の場に使われており、太政官曹司庁は正庁・東西庁の3つの庁が集まってできた形態をしていた。この点で太政官曹司庁は極めて特殊な成り立ちをしていたことになり、国庁のモデルとは考えられない。さらに弁官以下書記官である史生・官掌までもが西庁上に座を設けられていることから、弁官の政務は基本的に西庁上だけで完結していたと思われる。つまり弁官の政務には脇殿は必要なかったのである。また、宮内省も正庁に脇殿が付属する形態であったが、その脇殿は宮内省で行われる儀式の場としてさかんに使われていた。しかし、その儀式はいずれも宮内省が主導するものではなく、他の官司の者が主導する儀式であった。この点から宮内省のように脇殿がさかんに使われるのはむしろ特殊であり、逆に宮内省自身の政務は脇殿を使わず、弁官のように正庁上だけで完結していたと推測される。そして宮内省の脇殿の史料から脇殿の構造が床張りではなく土間であったらしいことがわかる。次に平城宮で発掘された式部省を見ると、その脇殿は床張りであった。つまり宮内省とは異なった構造であったが、このことから式部省の脇殿が儀式などで使われることがなかったと推測され、逆に文書の作成や保管のために使われていたと想像される。内裏の脇殿のように収納庫であったかどうかは不明だが、いずれにせよ曹司の空間構造も正庁－前庭という構造であったと言える。

結語

結語でははじめに全体の論旨の要約を行うとともに問題点の整理をする。本論で扱ってきた宮城中枢部とは単に儀式や政務の行われる場というだけでなく、それを建造した国家全体の理念や考え方が象徴的に表現されているものと考えてるので、以下宮城中枢部を通して日本古代の律令国家の特質について考察する。まず律令国家の成立・完成については近年奈良時代初めではなく、平安前期に求める意見が多くなっている。しかし宮城中枢部の展開を見ると、中国の太極殿の機能に近いのは飛鳥浄御原宮の「大極殿」であり、それが飛鳥浄御原令制定によって排他的な天皇の独占的空間の大極殿に変わり、天皇は貴族層とは内裏で対面し、全臣下とは朝堂で対面するという二つの顔を持つことになる。その背景には天皇権力の強化と神聖化があったと思われるが、それが再び中国化されるのが平城宮中央区であった。つまりここに宮城中枢

部の中国化の最大の画期があったことになる。しかし中央区も臣下を召す前庭を持ったとはいえ、そこは閤門内で、貴族層しか入れないという限界があった。中国の太極殿が全臣下に開かれていたのに対して、日本では貴族層にしか開かれていなかったのである。また、天皇聴政も排他的な大極殿の成立によって象徴的なものと実質的なものとに分離したが、それが統一されたのが長岡宮であった。そして光孝朝以後天皇聴政の場は紫宸殿ではなく清涼殿に移る。このように天皇聴政の場は徐々に奥の方に移っていったが、この点に古代天皇制の特質がよく現れている。つまり天皇が貴族層と全臣下とに対する二つの顔を持つ点、平城宮中央区が中国化したとしても結局貴族層しか入れなかった点から、天皇の目は畿内の豪族の系譜をひく貴族層にしか向いていなかったことがわかり、中国の皇帝が全世界に向かっていたのに対して、天皇はそうではなくあくまでも畿内の王権という枠から脱却できなかった。ここに小帝国として中国の模倣をしてきた日本古代天皇制の限界があった。この意味で畿内政権論には賛成であるが、貴族制論には反対であり、内裏正殿－前庭という空間構造からもわかるとおり、臣下の座は正殿上ではなく前庭に仮設された幄舎に設けられていた。つまり貴族層は天皇と畿内政権を形成する共同体ではあるが、両者の間にははっきりとした格差があったのである。そして殿上に座を持つ議政官だけが真に天皇の共同統治者と言えた。以上が古代天皇制の内実であったと考えられる。

論文審査結果の要旨

本論文は、日本の古代宮都のうち、内裏・大極殿などの宮城中枢部と曹司の構造と変遷、その歴史的意義について論じたものである。全体は3部7章よりなる。

序章では、これまでの研究史を整理して研究の課題を設定する。

第1部「中国の宮城中枢部」は、日本の都城と比較するために、その源流となった中国の魏晉南北朝から隋唐に至る宮城中枢部の構造と変遷を考察する。

第1章「魏晉南北朝時代の宮城中枢部」は、魏晉南北朝から隋唐に至る太極殿を中心とする宮城中枢部の構造と変遷について検討する。魏晉南北朝の宮城中枢部は太極殿の東西に東西堂を配置する東西軸の宮殿構造であったが、北朝の北周で『周礼』に基づき燕朝・治朝・外朝を南北に並べる南北軸の宮殿構造に転換し、隋唐はこの構造を継承したうえで、内朝・中朝・外朝の三朝型式の構造を作り出したことを主張する。

第2章「隋唐長安宮城中枢部の展開」は、唐の長安の太極殿と大明宮の宮城中枢部における皇帝の執務形態を考察する。両宮中枢部の宮殿の利用は、本来内朝の両儀殿・紫宸殿が皇帝の

居住、中朝の太極殿・宣政殿が日常的な聴政、外朝の承天門・含元殿が朝賀であるが、唐代後半には紫宸殿が日常的な聴政の場になることを明らかにし、これまでの『大唐六典』のみによっていた三朝の利用形態についての考えに再考をせまる。

第2部「太極殿の研究」は、第1部をふまえて日本の太極殿について考察する。

第1章「天皇聴政と太極殿」は、学界で議論のある天皇の聴政の場について検討する。奈良時代には天皇の聴政は、天皇が太極殿に出御して朝堂における臣下の朝政を視る象徴的な聴政と、内裏正殿における実質的な聴政の二重構造であったが、長岡宮以降、内裏正殿における聴政に一本化されることを解明する。

第2章「太極殿と大極殿」は、唐の太極殿との比較から大極殿の成立過程を考察する。689年の飛鳥浄御原令の制定によって、飛鳥浄御原宮において大極殿一郭が臣下を排除する天皇の独占的空間になる。唐の太極殿一郭は臣下が参入できるが、この点でこの時期の大極殿は日本独特の形態である。奈良時代初めに平城宮の中央区に臣下を召し入れる前庭を伴う大極殿が成立して中国化し、これが最大の画期であることを明らかにする。

第3章「旬儀の成立と展開」は、10日ごとに天皇が内裏紫宸殿に臣下を召して饗宴を賜い政務を行う旬儀に関する考察である。旬儀は、通説のように天皇の毎日の聴政が変質したものではなく、その本質は、天皇が臣下の奉献に対して饗宴を賜い、君臣関係を確認するところにある。旬儀は中国の定期入朝制を受容して9世紀前半の仁明朝に成立する。9世紀末の光孝朝には、旬儀が饗宴から政務儀礼に変質することによって、紫宸殿が政務の場から政務儀礼を含めた儀式的場に変質し、光孝朝は律令制的天皇から王朝国家的天皇へ転換する大きな画期であることを明らかにする。

第3部「宮城の空間構造」は、内裏と宮城内の役所である曹司について、正殿の前の東西に脇殿を配置する、いわゆるコ字形配置の空間構造の意味を考察する。

第1章「内裏の脇殿」は、内裏のコ字形配置の空間構造についての考察である。平安宮の内裏は正殿の紫宸殿の前の東西に各2棟の脇殿を配置し、脇殿は、通説のように天皇の座す紫宸殿に対して臣下の座す殿ではなく、収納施設である。儀式・饗宴は、紫宸殿の前庭に臣下の座を設けて、紫宸殿－前庭の形態で行われ、この内裏の利用形態は7世紀後半の飛鳥浄御原宮まで遡ることを明らかにする。

第2章「曹司の空間構造」は、同じくコ字形配置をとる曹司の空間構造について考察する。太政官・宮内省・式部省の曹司ではいずれも、儀式・政務で正殿－脇殿の形態ではなく、内裏と同じく正殿－前庭という形態で用いられたことを明らかにする。

「結語」では、宮城中枢部が国家全体の理念や考え方を象徴的に表現するものであるという考えに基づいて、宮城中枢部の構造から古代日本の律令国家の特質について次の点を指摘する。

(1)飛鳥浄御原宮において飛鳥浄御原令の制定によって、大極殿が天皇の独占的な空間になるのは、天武・持統朝の天皇権力の強大化・神聖化の結果である。奈良時代初め、平城宮中央区における臣下を召し入れる前庭を伴う大極殿の成立は、中国化という点で宮城中枢部の変遷における最大の画期である。天皇聴政の場が紫宸殿から清涼殿に変わる9世紀末の光孝朝は、律令制的天皇から王朝国家的天皇への転換の画期である。(2)天皇の聴政の二重構造において内裏における実質的な聴政は貴族層とのみ行い、また平城宮中央区の大極殿一郭に召し入れるのも貴族層だけであって、天皇が直接対面するのは、畿内豪族の系譜を引く貴族層に限られる点からみて、律令国家の天皇は大和政権時代の畿内の王権という枠から脱却できず、ここに日本の古代天皇制の限界がある。

本論文は、7世紀～9世紀の宮都の宮城中枢部と曹司の構造と変遷、その歴史的意義について、そこで行われる儀式・政務、中国都城との比較などの観点から解明し、さらにこの問題から日本の律令国家の特質を究明することに成功している。その考察は、高い実証性に裏付けられて説得的であり、多くの新しい知見を含んでいる。その研究成果は古代宮都の研究はもとより、律令国家の研究を大きく進展せしめるものであり、斯界の学問的發展に寄与するところ大なるものがある。

よって本論文の提出者は博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。